

研究ノート

経済理論の空間と時間

——「資本論」の批判的検討(1)——

Theoretical places and time of marxian economic theory

—— A critical reading of ‘Capital’ by K.Marx ——

前 原 芳 文

Maehara, Yoshifumi

ABSTRACT

‘Das Kapital’ by K. Marx shows the forms in which capital exists and functions. We can see, in that text, the developing forms of capital exists in the corresponding theoretical places from the most abstract one to the more concretes. And we see the theses of the dynamism of capital especially in the first two volumes of “Das Kapital” such as ‘accumulation of capital’ and ‘reproduction and circulation of social capital’. A Change of anything is historical and a process in a place and time. So we examine the text of ‘Das Kapital’ to confirm the theoretical palces and times in which the categories expressing the dynamism of capital are put forth. This research is a part of the study of marxian dynamic theory on credit system.

目 次

はじめに

I. 「資本論」第1巻・「資本の生産過程」の文脈

1. 商品・貨幣論（第1巻・第1篇）
 - i. 商品の二要因
 - ii. 商品に加えられる労働の二重性
 - iii. 商品の価値形態（以上本号）
 - iv. 商品の偶像崇拜的性質
 - v. 商品の交換過程
 - vi. 貨幣の価値尺度機能
 - vii. 貨幣の流通手段機能
 - viii. 貨幣
2. 剰余価値論（第1巻・第2～第6篇）
 - i. 絶対的剰余価値
 - ii. 相対的剰余価値
3. 蓄積論（第1巻・第7篇）
 - i. 単純再生産
 - ii. 資本の蓄積

II. 「資本論」第2巻・「資本の流通过程」の文脈

4. 資本循環論（第2巻・第1篇）
5. 資本回転論（第2巻・第2篇）
6. 総資本の運動（第2巻・第3篇）

III. 「資本論」第3巻・「資本家的生産の総過程」の文脈

7. 産業利潤論（第1巻・第1～第3篇）
8. 商業利潤論（第3巻・第4篇）
9. 利子論（第3巻・第5篇）
10. 地代論（第3巻・第6篇）
11. 諸階級論（第3巻・第7篇）

IV. 資本論の文脈

V. 価値論段階の理論空間と時間

はじめに

信用と現実諸資本の運動との関連とを定式化することは信用理論が解明すべき基本問題の一つである。この問題を考察する場合、われわれは諸商品に対する需要およびそれらの価格体系は変動しうるものとの想定が必要であると考えている。⁽¹⁾ また、信用の動態を定義する理論領域においては「時間」の取り扱い方が重要な意味をもつことになる。すなわち信用の動態を考察する際には時間の流れの中に明確な区切り（例えば営業日、週、月、年）を設定することが肝要である。時間の流れを「週」などの一定期間ごとに区切るのは、信用が諸商品に対する需要の「期間別の配分」に変化を引き起こすことに注目するからである。

例えば連続する「週」という時間の流れの中でこの問題を考察することによって、ある週、あるいは複数の週にわたって生ずる信用の量、信用の質、利子率、および通貨量の変化、あるいは銀行業者の貸出量、預金量、準備率、利潤率、および銀行通貨量の変化が、当該の（一つのあるいは複数の）週における現実資本の運動を規定する諸要因⁽²⁾にいかなる変化を及ぼすかを、また逆に現実諸資本の運動における諸変化が信用に及ぼす変化を、時系列的に表現することが可能になろう。

またこのような資本主義経済の動態をその時系列的な変化として表現する際には、現実資本が存在する製造業および商業の分野をいくつかの部門に分割し、またそれぞれの部門に複数以上の資本家的企業が存在するとの設定も必要であろう。それら資本家的諸企業の各部門における競争関係を表現するためである。

(1) 「利子・利子生み資本」論においてはともかく、信用と現実諸資本の運動との関連を考察する場合、すなわち「競争・信用論」の次元においては、現実の信用がそうであるように信用によって諸商品にたいする需要は変化するもの、またそれらの価格体系は変動するものと想定すべきである。それによってはじめて信用の意義は明らかになるであろう。

(2) 諸商品に対する需要量、諸商品の市場価格体系、産業資本の原材料や労働力投入量、固定的設備の稼働状態や固定資本投資、各商品の生産量、各商品の販売＝流通量、商品・原材料在庫量、現実諸資本が取得する利潤および諸資本の貨幣諸準備等々。

商業および金融業についても同様である。そうすることで信用→現実資本・現実資本→信用、の相互作用関係はそれら個別諸資本に現われる諸変化の全体として表現されよう。このような信用がひきおこす諸商品にたいする需要の変化、諸商品の価格体系の変化等を内部に含む信用理論をいま仮に「動態的信用理論」と呼ぶとすれば、その展開のためには資本家的経済の動態を規定する諸要因がすでに理論的に与えられていなければならない。それら個々の要因、それらの相互関係、したがって資本家的経済の理論的総体がすでに与えられていなければならないはずである。つまり、「動態的信用理論」は資本家的経済の「一般的数量モデル」を前提してはじめて可能になるものと考えられる。

このような資本家的経済の動態を表わす一般的なモデルの基本的な枠組みは「資本論」によって示唆されている。第三巻で定義されている剰余価値の諸形態（産業利潤、商業利潤、利子・企業者利得、地代）に労賃を加え、それらを同時に表現する理論空間を新たに設定することによって市場価格論次元における資本家的経済の単純再生産モデルが表現されるであろうし、またその空間に時間軸を書き加えれば、資本家的経済の動態を表わすことが可能であろう。

ところで、現実諸資本の動態を規定する諸要因については、第3巻だけでなくそれらの諸要因と関連する第1巻および第2巻における諸記述にも配慮して理解する必要がある。周知のように第1・第2巻は、労働の生産力の発展と蓄積とを基本的な動力とする資本の動態を表現しているものだからである。第1巻「資本の生産過程」における「相対的剰余価値論」（とりわけ「特別剰余価値論」）や「蓄積論」における蓄積と労働の生産力の発展との関連、また資本の蓄積＝集積および集中と労働の生産力の発展との関連に関する記述、第2巻第3篇にある拡大再生産表式をあげるだけでもそのことは明らかであろう。

「動態的信用理論」というものが概略が以上のようなものであるなら、その前には重大な理論上の諸問題が横たわっていることも明らかであり、それを創出するのはそう容易ではなさそうである。そのうちもっとも基本的な問題は、前述の産業部門それぞれの諸資本家的企業と全体の再生産と流通の動態を市場生

産価格論の次元でどのように表現するかというものである。そしてこの問題はさらに二つに分けて考えることができる。一つは産業部門の数と量的比率（資本家社会的生産の使用価値的編成の基本構造）をどのように設定し、また産業の各部門にある諸資本それぞれの前貸資本の大きさ、可変資本と不変資本の総額＝費用価格、生産量、生産物の市場価格、販売総額、利潤率をどのように設定するかである。いまひとつは、端緒として設定する期間の資本家的経済を、産業循環の各局面のうちどの局面を参考に表わすべきかという問題である。このうち最初の問題はいまはおくとして、後の方の問題について少し述べておきたい。

恐慌後の不況局面にある資本家的経済の状態を理論的に表わしたものをその端緒におくのがよいのではないかとわれわれは考えている。産業循環のなかのこの局面は次のような特徴をもっているからである。①各部門の諸企業による「流動性」の回復、縮小した信用の規模、信用量の比較的安定した推移、したがって現実資本の信用からの独立の程度が相対的に高いこと、②生産規模が相対的に収縮しているなかで産業各部門の生産物の供給と需要とのあいだに均衡と呼べるような関係が成立していること、③多くの部門で同一規模の生産と販売が一定期間、連続的に実現され、近似的な意味での「単純再生産」の関係が成立していること。

「動態的信用理論」の端緒となる局面をどこに求めるべきかはともかく、端緒の局面は必ず設定されなければならない。そこでわれわれはそれを「単純再生産」の概念を援用できる「恐慌後の不況期」に求めようと考えているのである。いずれの局面の資本家的経済の現実を参考に端緒期間を理論的に描くにしても、市場生産価格次元の「単純再生産」の状態を理論的に表現できない限り、他の各局面における資本家的経済の動態を表現するのは不可能であろう。価値論次元では、拡大再生産の概念は単純再生産の概念を前提するものである。それと同様のことが市場生産価格次元についても妥当するものと考えられる。

以上のような視角から本稿では価値論次元（「資本論第1巻・第2巻」で「時間」がどのように取り扱われているか、またそこではどのような理論空間が想

定されているのか、という点を中心に「資本論」のテキストを検討する。

不可逆な歴史的変化を遂げるものであればどんなものであっても、その時間的な変化を表わすには然るべき理論空間と時間軸とが設定されていなければならないはずである。そのことは資本または資本家的経済についても妥当しよう。そこでまず、「資本論」において資本家的経済の「時間」的な変化に関わる重要な諸概念がどのような位置を占め、またどのように定義されているのか確認する作業をおこない、さらにそれをふまえそれぞれの巻内部での諸概念相互の関係、およびそれぞれの巻相互の内容上の関連、つまり「資本論」の基本的な文脈を明らかにしたい。そして次には、価値論次元における資本または資本家的経済の変化を表わす諸概念がどのような時間軸のなかで説かれているのか、同時に、いかなる理論空間のもとでそれがおこなわれているか（またはいかなる理論空間を描きあげつつそれがおこなわれているか）⁽³⁾を明らかにしたい。

I. 「資本論」第1巻・「資本の生産過程」の文脈

I-1. 商品・貨幣論（第1巻・第1篇）の文脈

I-1-i. 商品の二要因（使用価値と価値）

資本家的生産様式が支配的な社会では「富」が商品という形態（または形式）で現われる。そこで商品の分析から「われわれの研究」⁽⁴⁾をはじめめる。

商品はさしあたり使用価値であり同時に交換価値でもあるものとしてわれわれの前にある。

使用価値 人にとって有用な物は使用価値である。どんな社会においても使用価値は富の素材あるいはその中身をなしている。この社会では使用価値は商

(3) マルクス・エンゲルス全集版「資本論」（大月書店、1968年）をテキストとして使用する。論旨の明確な把握を期すために、その原書、Karl Marx, Das Kapital, Dietz Verlag, Berlin, 1974.および、Karl Marx, Capital, Progress Publishers, Moscow. を参照する。本稿におけるテキストからの引用文は必ずしも大月書店版と同じではない。引用文には（B.1,S.53.）のように、原書の掲載巻、および頁を可能なかぎり付す。原書の掲載頁が記載されていない場合は近くにある引用文に付されたものを参考にされたい。

品が——消費手段としてであれ、生産手段としてであれ——もっている有用な性質のことである。商品の使用価値はその物理的属性に制約された性質であり、商品体と不離不可分の関係にある。また商品の使用価値が実際にその有用性を発揮するのはそれが消費されるときである。さらに使用価値はこの社会では商品の交換価値の素材であり、その担い手（Träger）でもある。

交換価値と価値 一商品の諸交換価値が表わす「同じもの」諸商品の交換価値は「それらに共通なある実質」を表わしている。たとえば、「1 クォーターの小麦は、 x 量の靴墨とか、 y 量の絹とか、 z 量の金とか、要するにいろいろに違った割合の他の諸商品と交換される」(B.1, S.51.⁽⁵⁾)。ここで x 量の靴墨、 y 量の絹、 z 量の金、はすべて等しく 1 クォーターの小麦の交換価値である。だから x 量の靴墨、 y 量の絹、および z 量の金、は 1 クォーターの小麦の交換価値という質においてもまたその量としても等しい。すなわち x 量の靴墨 = y 量の絹 = z 量の金という等式に表わせる関係にある。このことから、第一に、一つの商品（1 クォーターの小麦）の諸交換価値（ x 量の靴墨、 y 量の絹、 z 量の金）は一つのものと同じものを表わしているということが、また第二に、一般に交換価値は交換価値そ

✓(4) 商品論は、このように資本的生産様式と商品形態との関連が簡単に指摘されている一文に始まっている。資本を巡る議論を資本からではなく商品からはじめる理由が簡潔に示されているのである。後にこの章第四節「商品の呪物的性格とその秘密」の注 32 に、「労働生産物の価値形態は、ブルジョワ的生産様式のもっとも抽象的な、しかもまたもっとも一般的な形態であって、これによってこの生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、したがってまた同時に歴史的に特徴づけられているのである。それゆえ、この生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの独自性をも見そこなうことになるのである。」(B.1, S.96.) とある。重要な諸概念が表わしている経済的な諸実体の分析がそれらの形態の分析で始められているのは「資本論」の特徴の一つである。ここで始められようとしているのは、資本主義的生産様式の最も抽象的で一般的な形態であり、資本家的生産様式が支配的なこの社会における富の存在形式、すなわち商品形態の分析である。

(5) 実際、自分の商品がどれだけの「値打ち」をもっているのか、あるいはもっていなければならないのかを知らずにそれを手放す者などいない。商品の持ち手なら誰でも市場でそれを実際に手放す前にその商品がどれだけの値打ち = 「交換価値」をもつかは知っているのである。1 トンの鉄を市場に持ち込む者は、その値打ちが銅ではかれば 200kg の銅に相当し、小麦ではかれば 500kg の小麦の値打ちがあり、パンでなら 10 斤のパン、等々に相当するのを弁えたうえで市場に参加するのである。

のものとは別な「ある実質」の表現様式、または「現象形態」である、ということが明らかである。

さらに小麦と鉄、二つの商品をとってみると、それらの交換比率はどうであれ二つの商品の関係は常に、たとえば1クォーターの小麦=aツェントナーの鉄という等式で表わせる。すなわち二つの商品は等置できるのである。このことは二つの違う物のなかに「同じ大きさの一つの共通物」が存在することを意味する。

抽象的人間労働 では「交換価値とは別のある実質」あるいはこの「同じ大きさの一つの共通物」とは何であろうか？

諸商品の交換関係はそれらの使用価値の捨象によって特徴づけられている。そこで、商品体から使用価値を捨象すると、それらに残るものは労働生産物と

(6) この章でも数多く使用される「商品の交換関係」という語は様々な意味に理解可能なように思われる。第一に、(商品交換で)手放される「ある商品の価値計算のために想定される当該商品の交換関係」。第二には「ある商品と別種の諸商品との現実の相互的な譲渡である交換関係」。さらにいまひとつ：貨幣によって媒介されるある商品の現実の交換関係は、結果としては当該商品の持ち手のもとに別種の諸商品を残す。この結果こそ商品交換の実質である。そこで商品交換の実質だけを表わす「一商品の他種商品との交換関係」として理解するということも可能かもしれない。

いずれにしてもマルクスがこの章で「交換価値」、「交換関係」という語をいかなる意味で使っているか、いまひとつはっきりしないようにみえる。例えば、49頁(原書)には「交換価値」の説明のために、「ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、x量の靴墨とか、y量の絹とか、z量の金とか、要するにいろいろに違った割合の他の諸商品と交換される。」(B.1,S.49.)とある。この場合の「商品交換」は一先の引用文には特別な限定のないことからして——いわゆる物々交換または「直接的な生産物交換」、一「商品」と別な一「商品」とが現実にもた直接的に交換される関係とも理解しうる。価値形態論に登場する——ある一商品の価値表現のための材料となる別な一商品がもつ——「直接的な交換可能性」の概念についても同様のことがいえるよう。

商品形態分析はこの社会の編成主体である資本の「もっとも一般的な形態」である「商品形態」を定義するためのものであって、それをふまえて次には貨幣という商品価値の一般的な存在形式を、さらには資本という商品価値の一般的な運動形式を定義するという議論展開上の企図により制約されていることは明らかである。したがって論理の運びとして貨幣の存在を前提にせず商品进行分析し・定義するのは避けられない。しかし、そうとしても二つの商品のあいだの現実的で直接的な交換を想定し「商品の交換関係」を分析することにより、商品について何らかの定義を導くというのは腑に落ちないことである。

ところで、第三節「価値形態A単純な価値形態」最後のパラグラフ(B.1,S.76.)には次の

文章がある。「とはいえ、個別的な価値形態はおのずからもっと完全な形態に移行する。個別的な価値形態によっては、一商品Aの価値はただ一つの別種の商品で表現されるだけである。しかし、この第二の商品がどんなものであるか、……は、まったくどうでもよいのである。つまり、商品Aが他のどんな商品種類にたいして価値関係にはいるかにしたがって、同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。」(傍点は筆者によるもの、以下特別の指摘がない限り傍点はテキストによる。)

ここで述べられている「価値関係」とは、交換関係のなかに置かれた一商品が別種の諸商品と互いに価値として関係し合うということである。問題はこの価値関係に関与する諸商品の集合をどのようなものとして捉えるかである。この語の理解の仕方としては三つのものが考えられよう。①、一般に諸商品の価値関係は現実の商品交換によって成立するものと考え、文字通り、一商品と社会にある他の全ての商品種類との現実的で直接的な交換関係により成立する価値関係のことと理解する。②、仮に商品交換が貨幣によって媒介されることを想定しても、一商品が社会にある全ての別の商品種類と交換されると考えるのはあまりに現実的ではなく、まして貨幣の媒介なしの生産物交換であるとするれば一生産物と交換される他の種類の生産物の範囲は極端に限られるものと考えて、ごく少数の生産物との「価値」関係であると解する。③、全ての商品が現実交換で差し出される前におこなわれているはずの、商品の「価値計算上の価値関係」という表象を基礎に得られた観念上の関係と理解する。テキストでは商品の持ち手の観念上の交換関係としてではなく、一商品の行為により発生する関係として表現されている。この「置き換え」は論理展開の必要から生じているものであって、商品を主体に関係を説くことに何らかの問題があるとは考えられない。またこの社会の全ての商品が「他人のための使用価値」として生産され、したがって交換される必然性に捉えられているのであるから、商品を主体として発生する関係として交換関係を指定し、分析することに何らの不思議さもない。

私は三つめの理解でよいと考えている。それは以下の理由による。後の第三節「B.全体的価値形態」におけるマルクスの議論は、一商品の価値が社会にある他の全ての商品種類を等価値形態におくという、文字通りの、一商品の全体的価値形態論と理解しうる。そのことから②の理解は排除されるべきである。また、①はそもそも現実性に欠けること甚だしすぎるからこれも排除するべきである。というのは、貨幣の存在しない市場空間において、ある商品がその社会の全ての商品種類と交換可能になるという状態は、その実現のための時間と労力を想像すれば、現実には絶対にありえないことが直ちに明らかになるであろう。資本家的社会の現実で絶対に起きえない商品の交換形式を想定して、その関係における商品の存在形式を明らかにし、商品の価値や価値形態を説いたと称するものがあつたにしても、それをまっとうな価値形態論と認めるわけにはいかないだろう。

ともあれ、「交換関係」をどのようなものとして理解すべきかというこの問題は、実は、われわれが商品の価値分析や価値の形態を論ずる際に、どのように交換関係を設定すべきかという問題なのである。そもそも資本家的生産様式の最も抽象的で一般的形態である商品形態を分析の、したがって概念展開の端緒に置き、次に商品価値の貨幣形態、さらに商品価値の資本形態を説こうとする立場から商品进行分析する場合、必ず商品の「交換関係」を分析の俎上に乗せなければならないはずである。商品の交換関係の指定なくして商品の交換価値を分析することは不可能である。また商品の交換価値の分析なしに商品価値は明らかにされえない。問題はそのさいに諸商品の交換関係や交換価値を理論的にどのようなものとするかである。

いう属性だけである。しかし、使用価値を捨象するということは、第一に、この労働生産物を使用価値にしているそれらの「物的諸成分や諸形態」、およびその有用性、つまり物的な性質の全てを捨象することである。第二には、それらの有用性を生みだす労働の有用性およびその具体的形態を捨象し、「同じ人間労働」、「抽象的人間労働」に還元することである。

そうするとそれら労働生産物に残っているものは、「同じまぼろしのような対象性」、「無差別の人間労働の・・・ただの凝固物」という性質だけである。それら労働生産物はそれらに共通な社会的実体（「同じ人間労働」）の結晶であり、その意味でそれらは価値－商品価値なのである。

価値量 したがって商品の価値の大きさは「価値を形成する実体」、すなわち「同じ人間労働」の量によってはかられる。さらに労働の量は労働の継続時間ではかられる。

個別的労働力と社会的総労働力, 社会的平均労働力 ただし、怠惰または熟練の不足のため一商品を生産する労働に長い時間を要するということから、その商品の価値がそれだけ大きいということにはならない。「諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値となって現われる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成っているのであるが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされるのである。これら個別的労働力のおのおのは、それがここでは一つの同じ人間労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においても平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間労働力なのである。また社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度をもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である。(B.1,S.53.)」

✓ それについては先にあげたものを含めて複数以上の選択の途があろう。私はとりあえずそのうち③を選択し、以下、「交換関係」の語を基本的にそのようなものとして理解しながらテキストの展開を追うことにする。

商品の価値量と労働生産力との関係、労働の生産力を規定する諸要因 「もしもある商品の生産に必要な労働時間が不変であるならば、その商品の価値の大きさも不変であろう。しかし、この労働時間は、労働の生産力に変動があれば、そのつど変動する。労働の生産力は多種多様な事情によって規定されており、なかでも特に労働者の技能の平均度、科学とその技術的応用可能性の発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模（Umfang）および作用能力、さらにまた自然事情によって、規定されている。（B.1,S.54.）」したがって、「一般的に言えば、労働の生産力が大きければ大きいほど、一物品の生産に必要な労働時間はそれだけ小さく、それに結晶している労働量はそれだけ小さく、その商品の価値はそれだけ小さい。」（B.1,S.55.）

社会的使用価値 空気や処女地、自然の草原、野生の樹木などは人にとっての有用性をもつとしても、人間労働の生産物ではなく、使用価値ではあるが商品ではない。また自分自身の欲望を満足させるために生産される労働生産物も使用価値ではあるが商品ではない。単に使用価値としてではなく、「他人のための使用価値」、すなわち「社会的使用価値」として生産されるものだけが商品である。「最後にどんな物も、使用対象であることなしには、価値ではありえない。物が無用であれば、それに含まれている労働も無用であり、労働のなかにはいらず、したがって価値も形成しないのである。」（ebenda）

I - 1 - ii. 商品に加えられる（verkörpern, embodied）労働の二重性

使用価値をつくる有用労働 社会的分業、私的労働、人間の生活＝人と自然のあいだの物質代謝
いま二つの商品、1 着の上着と 10 エレの亜麻布があって、前者は後者の 2 倍の価値をもっている、その意味で 1 着の上着＝20 エレの亜麻布の関係があるものとする。上着と亜麻布とは有用性があり、したがってそれらは使用価値である。使用価値の有用性に注目して労働をみれば、それは有用労働である。上着と亜麻布はそれぞれ裁縫、織布というその目的、作業様式、対象、結果において質的に異なる有用労働の成果である。上着と亜麻布とが商品として互いに向かいあうのは、それらが質的に異なる有用労働の成果であり、し

たがって互いに異なる使用価値であるからなのである。諸商品の使用価値の総体にはさまざまな有用労働の総体、すなわち社会的分業が対応する。社会的分業は商品生産の存在条件である。だが、逆に、商品生産が社会的分業の存在条件であるとはいえない。社会的分業がみられる工場の労働者たちがそれぞれの生産物を商品として交換していないことをみればそのことは明らかである。

要するに、「独立におこなわれていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対する」(B.1.S.57.) のであり、また「社会の生産物が一般的に商品という形態をとる社会では、すなわち商品生産者の社会では、独立生産者の私事として互いに独立に営まれるいろいろな有用労働のこのような質的相違が、一つの多肢的体制に、すなわち社会的分業に発展するのである。」(ebenda)

どんな社会においても、特殊な自然素材を人の欲望を満たす有用物＝使用価値に変えるには合目的的な生産活動＝有用労働が必要である。したがって有用労働は、すべての社会形態から独立な人間の存在条件であり、「人間と自然との間の物質代謝を、したがって人間の生活を媒介する・・永遠の自然必然性である。」(ebenda)

上着や亜麻布など使用価値である商品体は、自然素材と有用労働との結合物である。使用価値の生産において、人は自然素材の形態を変えているだけであり、しかも自然力の助けにたよってそれをおこなっているにすぎないのである。つまり労働だけが使用価値の源泉なのではなく、ウィリアム・ペティが言うように、労働は素材的な富の父であり、土地はその母なのである。

商品価値をつくる労働 上着と亜麻布という二つの商品は、価値としては同じ実体をもった物、すなわち同じ人間労働の客体的表現である。他面それをつくる労働は、裁縫と織布という互いに異なる有用労働である。つまり諸商品をつくる労働は二重の性質をもっている。

裁縫と織布とが特定人の機能として固定されおらず、一般に一人のひとが

裁縫も織布も自分の労働の特殊な形態としておこなうという社会もある。それにたいして、資本主義社会の労働は二面性をもっているから、労働需要の変化にしたがって社会的総労働力が、その一部は裁縫へ他の一部は織布へと振り分けられることになる。いまその有用的性格を無視するとすれば、この社会の労働に残るのは人間の労働力の支出という性格だけであり、商品の価値は労働のこの性格を表わしているのである。

単純労働と複雑労働 近代市民社会では將軍や銀行家は大きな役割を演じ、ただの人間が演ずるのはひどくみすばらしい役割である。人間の労働もそれと同じである。労働は（一方では）人間労働力一般の支出、普通の人が特別な発達なしにその肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である。国がちが文化の段階が異なれば、単純な平均労働の性質（Charakter）も異なるのであるが、それはある時代の一つの社会では与えられている。（他方、）複雑労働は強められた労働、あるいは何倍かの単純労働として認められる。すなわち一定時間の複雑労働による生産された商品はより長時間の単純労働の成果である商品に等置されるのである。以下では換算の労を省くために、各種の労働の全てを単純労働と見なすことにする。

先の想定では1着の上着と10エレの亜麻布とは、価値量において異なるものとされた。この価値量の相違はそれぞれの商品に支出された労働力の量の相違にもとづくものである。商品に含まれている労働は使用価値との関連ではただ質的に、また価値量との関連では抽象的人間労働という以外の性質をもたない労働に還元されてただ量的にのみ認められる。したがって、上着を生産するための全ての労働の生産力が不変であるならば、上着の量が増えるのに正比例してその価値量は増大する。また上着を生産する労働の生産力が低下し、1着の上着の生産に必要な労働が2倍になれば、その価値も2倍になる。逆に労働の生産力が増大し、1着の上着に生産に必要な労働が $\frac{1}{2}$ になれば、その価値も $\frac{1}{2}$ に低下することになる。⁽⁷⁾

素材的富としての商品の量の増大とその価値量の低下とが同時に生ずるこ

とがあり得る。そうした相反する運動が起こるのは労働の二面性のためである。生産力とはいつでも有用労働の生産力であり、一定時間の合目的生産活動がどの程度作用するかを表わしている。生産力の変動は価値に表わされる労働そのものには全く影響しない。どれほど生産力が変動しても、労働が一定時間内に生み出す価値量は同じなのである。

すべての労働は、「生理学的意味での人間の労働力の支出」、その意味で「同等な人間の労働または抽象的人間労働」であって、この属性において商品価値を形成するのである。全ての労働は、他面では、特殊な、目的を決めておこなわれる人間の労働力の支出である。この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を形成するのである。

I - 1 - iii. 商品の価値形態

諸商品は同じ社会的な単位、すなわち同じ人間労働の様々な表現であり、そのかぎりで価値なのである。商品の価値はそうように社会的性質なのであるから、それは諸商品の社会的な関係＝交換関係のなかでしか現われない。次には商品の価値が交換関係のなかでどのように現われてくるかについて詳細に考察する。

諸商品の価値が貨幣で表現される商品価値の貨幣形態のことは誰でも知っている。そこで商品の価値のもっとも単純な形態からはじめて貨幣形態に至るま

✓(7) この箇所は厳密には、＜一つの社会において、単純な平均労働の性格が不変という条件のもとで、労働の生産力が変化する場合でも一定時間内に一定種類の労働が生み出す価値量は変化しない＞との意味である。それにたいして＜時間の経過によって単純な平均労働の性格が変化し、しかも一種類の労働の生産力に変化が生ずる場合、しかも一商品を生産する労働の生産力が変化する場合に、一定時間内に同労働が生み出す価値量は同じと言えるか否か＞という問題も考えられるが、ここでの理論空間はその問題が説けるようには設定されていない。すなわち、あるときに特有の性格をもった単純な平均労働があるとすれば、別な（後の）ときにはその‘とき’に特有の性格をもつ単純な平均労働があると考えることができる。‘最初’のとき、ある商品の価値量は‘最初’のときの単純な平均労働で計られ、次に‘後のとき’には同じ一商品の価値量は‘後のとき’の単純な平均労働で計られるわけである。この場合において、当該の商品を生産する労働の生産力が変化する場合、例えば2倍になるという場合に、当該商品の価値量は、どう変化するかという問題は、‘別なときの単純な平均労働’が想定されていないここでは考えられてはいないということである。

でのその発展の跡を追うことにする。それによって貨幣が存在する必然性が明らかになるろう。

諸商品のもっとも単純な交換関係はある一つの商品のそれとは別の種類の一商品に対する交換関係であり、この関係のなかに商品のもっとも単純な価値形態が現われている。

A. 単純な価値形態

20 エレの亜麻布＝1 着の上着（20 エレの亜麻布は1 着の上着に値する）

これまでの検討からこの等置関係が両辺にある二商品の価値関係であることは明らかである。しかし、そうであるからといって亜麻布の上着との交換関係のなかでそれらの両方が同時に価値物の姿で現われるわけではない。この交換関係のなかで価値物として現われているのは上着だけであって、亜麻布はそうではない。なぜかと言えば、ここでは上着は亜麻布によって自らの価値を表現してはいないからである。この亜麻布の単純な価値形態において20 エレの亜麻布は自分の価値を別の商品（一着の上着）の現物形態で相対的に表わす役割・機能が与えられている。ここで亜麻布はそういう機能の存在形態、すなわち「相対的価値形態 Relative Wertform」である。他方、一着の上着は20 エレの亜麻布と等価であるという機能が与えられており、そういう機能の存在形態、すなわち「等価形態 Äquivalentform」なのである。これら二つの形態は相異なる機能を果たしながら商品・亜麻布の価値形態を構成する相互に不可欠また不可分の二契機をなしている。また上着は亜麻布により「直接的に交換可能なもの」、したがって「等価形態」は「直接的な交換可能性」の形態でもある。

まず、その量的な側面（20 エレの亜麻布にここではたとえば3 着の上着ではなく1 着の上着が等置されている）は無視し、その質的な側面だけに注目してこの交換関係をみると、次の二つのことが明らかである。①亜麻布はさしあたり現物形態で現われている。②その亜麻布によって上着は価値物と認められている。それ自体はただの使用価値にすぎない上着がこの関係のなかでは価値物として現われているのである。20 エレの亜麻布の上着との交換関係のなかに直

接に現われているのはこの二つだけである。⁽⁸⁾

そこで、この価値物という上着の性質に注目してこの等置関係をみると、亜麻布が上着を自分に等置する根拠が、すなわち二つの商品の価値関係が浮かび上がってくる。このように上着の価値性質に照らされて、上着との交換関係に亜麻布の価値形態が現われる。⁽⁹⁾

またこの交換関係のなかでは、上着に含まれている労働＝裁縫は具体的有用労働でありながら同時に価値物をつくる労働、すなわち社会的総労働の一部として現われている。そして価値物＝上着をつくる労働が亜麻布をつくる労働＝織布に等置されていることはそれぞれの使用価値によって明らかである。われわれは商品価値をつくる限りでは亜麻布をつくる織布労働もまた価値形成労働

(8) 亜麻布が「相対的価値形態」として現われるのは、そもそも亜麻布も他の全ての商品と同様に社会的な使用価値として生産される物であって、(たとえば上着と) 交換される必然性を有しているからにほかならない。

(9) 上着が価値物、あるいは価値体として現われることによって、上着のなかに亜麻布の価値性格が映し出されるのだというテキストの叙述 (B.1,S.66.) は俄に飲み込めるものではない。ここで価値物・上着で現われているものが亜麻布の価値だとする根拠は、上着の価値性格が照らし出すといわれる亜麻布の価値性格と同様に薄弱だとの印象を否めない。

ところで、マルクスが商品の価値形態を「発見した」過程については、単なる使用価値である労働生産物の直接交換を表象し「単純な交換関係」が指定されたと想像させる箇所もテキストに散見される。だがそれとは別に、この「発見」は、まず商品価値の貨幣形態から一般的価値形態が、次には一般的価値形態から全体的な価値形態が「発見」され、さらに全体的価値形態の最も単純な形態として「単純な価値形態」が「発見」される、という順序で生じたのではないかと推察される。というのは形態の「発見」はより発見のしやすい形態から順番に、と考えるのが合理的だからである。逆にそれが商品の価値形態であるかどうかも分からないくらいの商品の単純な価値形態がはじめに発見され、その後テキストの叙述の順で発見が進展したと考えるのは無理であろう。そのようなことを考えながら価値形態論を眺めてみると、次のような事柄が浮かび上がってくる。いわば自明の商品の価値形態である貨幣形態から一般的価値形態を「発見」することは確かに価値形態研究の「一步の飛躍」ではある。だが、それは形式的には貨幣形態の例の等式の等価形態にある貨幣商品を一般商品に置き換えたにすぎない。次の一般的価値形態から全体的価値形態の「発見」は、形式的には両形態をただ入れ替えただけにすぎないとも言えるが、これこそ文字通りの価値形態の「発見」における「飛躍」というべきである。その次の全体的価値形態の単純な価値形態への解体は「全体的価値形態の要素分解」であり、要素分解は何かを分析するものなら誰でもが試みる常套手段であることからすれば、全体的価値形態から単純な価値形態への遡行は取り立てて騒ぐほどのことではない。

「発見」の順番と叙述の順番についての私の推量の可否はともかくとして、全体的価値形態においては、等価形態の諸商品の使用価値とそれをつくる全ての種類の労働の差異が、商品・亜麻布の他の種類の諸商品との全体的な交換関係により直接に否定され、それらが単なる人間労働の生産物に、したがって同じ人間労働に還元されることがはっきり現われている。また同時に相対的価値形態の商品も単なる人間労働の生産物に、またそれに含まれる労働も同じ人間労働に還元され、したがって、一商品の全体的価値形態において表わされているものが相対的価値形態にある商品・亜麻布に含まれる同じ人間労働であり、したがってそれを実体とする亜麻布の価値であるという点でも説得的である。単純な価値形態における亜麻布の価値性格がおぼろげであるのにたいして、全体的価値形態では相対的価値形態の商品・亜麻布の価値性格が等置関係のなかに明確に現われている。この差は等価形態にある商品の「数の力」によるものと考えられる。

商品の交換関係のなかに現われる「同じ人間労働」は商品価値の実体をなす。この「同じ」は全体的価値形態では三重の意味で使われている。その一：等価形態にある全ての商品が価値物として認められている。価値物であるという性質から上着には同じ人間労働が化体されている、だからここで現われているのが亜麻布の価値だとされる。商品の交換関係または交換価値の背後に価値が控えていることは、商品の分析（第一節）で明らかになったことである。だが商品の交換関係では商品の価値は直接には交換価値としてのみ現われてくるもので、価値そのものという何か特別の姿で現われてくるはずはない。そうであるから一商品の諸交換価値の等置関係から使用価値・具体的有用労働を捨象し、交換価値を価値に還元する、あるいは演繹することが必要であったのである。その二：全体的価値形態で等価形態にある全商品は亜麻布を媒介に等価形態の内部で等置されている、つまり「同じ」ものとして現われている。等価形態内部での等置が表わす「同じ」ものである。等価形態にある諸商品の等置関係が引き起こす使用価値の捨象によって、労働の具体的・有用な性質とその諸形態も捨象され、それらの労働の「同じ」人間労働という性格が顕現する。「数の力」とはこのことである。その三：等価形態にある全商品を「同じ」人間労働に還元した「等価形態にある商品の数の力」は相対的価値形態にある亜麻布にまで及んで、織布の具体的・有用性を捨象し、亜麻布も等価形態にある全ての商品をつくる労働と同じ人間労働を含んでおり、したがって亜麻布も価値であるということを照らし出す。要するに、＜20 エレの亜麻布は1 着の上着、または10 ポンドの茶、または40 ポンドのコーヒー、または1/2 トンの鉄・・・・に値する＞が亜麻布の価値形態の全体を表現していると主張する根拠としては、上の三つの「同じ」の理屈のうち二つ目と三つめのものだけで十分である。

ちなみにマルクスは第一節でおこなった諸交換価値を価値に還元する過程を実際に「拡大された価値形態」が含まれる交換関係から始めている。そこで提示されているのは次のような交換関係であった。「ある一つの商品、たとえば1 クォーターの小麦は、x 量の靴墨とか、y 量の絹とか、z 量の金とか、要するにいろいろに違った割合の他の諸商品と交換される。」(B.1,S.51.) この1 クォーターの小麦の諸交換価値だけから、それらを価値に還元することは可能である。上の引用の次には確かに1 クォーターの小麦の単純な交換関係が提示されているが、それに言及しなくとも交換価値の価値への還元は可能であり、交換価値の価値への還元という観点からすれば、そこでの単純な交換関係の提示は蛇足であるように見える。

上述のような全体的価値形態にたいして単純な価値形態では、上着は価値物だと認められている。だから他の全ての商品と「同じ」人間労働＝社会的総労働の一部分が亜麻布に対象

であることを知っているが、そのことは然るべき亜麻布の形態では現われてはいない。ただ、上着をつくる労働が価値形成的労働として現われていることとの対照で、浮かび上がってはいる。こうして、この交換関係においては亜麻布に対象化された価値形成労働が、上着をつくる労働で表現されているのである。このように亜麻布の価値は上着の現物形態あるいは使用価値で相対的に現われる。一般に、商品 A はその価値をそれとは別の種類の商品 B の現物形態あるいは使用価値で相対的に表わすのである。

ところで、商品の価値形態は商品が価値性質だけでなく商品の価値量をも表わすものでなければならない。商品の価値には諸商品に共通の社会的単位である同じ人間労働が現われているのだから、商品の価値量はそれが含む同じ人間労働の大きさによって決まる。したがって、20 エレの亜麻布＝1 着の上着（20 エレの亜麻布は 1 着の上着に値する）という等式が亜麻布の相対的価値形態が商品の価値量について示しているのは次のことである。すなわち、亜麻布に含まれる人間労働の量は、1 着の上着に投下されている同じ人間労働の量に等しい。

✓ 化されていることは第一節の議論から理解できる。だが、亜麻布と上着の価値関係、したがって亜麻布が価値であることは交換関係のなかに直接には現われてこないはずなのである。価値関係が見える理論上の場所は商品の交換価値が現われているその場所からさらに諸商品の使用価値の抽象によって遡ったところ、交換価値が現われることの背後に隠れた理論的場所なのであるから、そこに価値関係が現われるはずがないのである。つまり、価値関係は価値形態論では本来前提できないはずのものと考えべきなのである。

しかし、だからといって全体的価値形態の二つめの意味での「同じ」を言うには、単純な価値形態の等価形態内部には上着のほかに数がない。つまりこの意味での「同じ」関係が単純な価値形態を含む交換関係には存在しないのである。だからそもそもそれが亜麻布の価値形態であるとする根拠の点で「単純な価値形態」の議論は全体的な価値形態よりも説得力がないと言わざるを得ない。そうした事情から二つの商品の交換関係が直接に見えるようににはしていないはずの上着と亜麻布の価値関係が、強引に、全体的価値形態における二つ目、三つめの「同じ」の欠落を補うべく持ち出されているようにみえる。しかし、そのことによって「単純な価値形態」における議論は価値形態論の論理をかえって不鮮明にしているように思える。

全般的な価値形態では諸商品の価値関係を前提に置かずとも、交換関係だけからそれが商品・亜麻布の価値形態であることが明らかである。要するに、「単純な価値形態」を「全体的価値形態」の一構成要素をなす一商品の価値形態として捉えれば、「単純な価値形態」の主旨も理解しやすい。

ただし、亜麻布を作る織布労働と上着を作る労働、それぞれの生産力は変化しうる。そしてそれぞれの労働の生産力の変化に応じて 20 エレの亜麻布と 1 着の上着のそれぞれに対象化されている人間の労働の量も変化する。そのため上着で表わされる 20 エレの亜麻布の相対的価値の大きさも変化する⁽¹⁰⁾のである。

一商品 A の価値の別の一商品 B の使用価値で表現される単純な価値形態においては、商品 A の価値はそれ自身の使用価値とは異なるものとして現われた。また、商品 A に含まれている労働が、商品 B に含まれている労働と同じであることをおぼろげに示してはいる。だが、商品 A に含まれている労働が他の全ての商品に含まれているのと同じ人間労働であるということは表現してはいなかった。さらに一定量の商品 A の価値量が一定量の商品 B と同じであることを表わしてはいたが、一定量の商品 A の価値量が他の全ての・様々な量の諸商品の価値量と比較可能であるということも表現してはいなかった。単純な価値形態が未成熟な商品の価値形態であることは明らかである。だが、それが商品である限り、一商品 A は商品 B と交換されるだけでなく、他の無数の種類の商品と交換されなければならないのであり、商品 A の単純な価値形態もそれらの交換関

(10) 「相対的価値形態の量的規定性」における一商品の相対的価値量と先の単純な平均労働で計られる一商品の価値量とは同じ「価値量」とはいえ厳密には意味が異なる。単純な平均労働により諸商品の価値が計測される場合、諸商品の価値量は単純な平均労働により生産される特定種類の一商品あるいは少数の商品がそれらに等置されることにより表わされる。これにたいして「相対的価値形態の量的規定性」で説かれているのは、ある商品の価値量の、さしあたりは任意の別な種類の一定量の商品による表現である。そしてこの任意の種類の商品は必ずしも単純な平均労働の生産物ではない。「相対的価値形態の量的規定性」の議論の終着点は貨幣形態にある。そこではたとえば金によって諸商品の価値量が統一的に表現される。そしてこの金という貨幣商品も単純な平均労働の生産物とは考えられない。したがってもし単純な平均労働により生産される商品をつくる労働の生産力も貨幣商品を生産する労働の生産力もともに変化しない場合、またはいずれも変化するがその方向と程度が全く同じという場合には、諸商品の価格体系（諸商品価値の貨幣形態の体系）は単純な平均労働の量に正比例して変化するであろう。それ以外の場合には、商品の価格体系の変化は単純な平均労働が単位時間あたり生み出す価値量の変化を正確には反映し得ないと言わざるをえない。こうした事情は商品価格が商品価値量から乖離する原因をしめすものかもしれない。ただし、以上の議論は、単純な平均労働が特定の諸商品（諸使用価値）を生産する具体的有用労働により体现されているということを前提したものであって、そうした前提がこの論理段階で成立しうるのかは検討を要することではある。

係の数だけ存在するのである。たとえば、

B.全体的価値形態

20 エレの亜麻布=1 着の上着（または）=10 の茶（または）=40 のコーヒー（または）=1/2トンの鉄……（20 エレの亜麻布は 1 着の上着、または 10 の茶、または 40 のコーヒー、または 1/2 トンの鉄……に値する）

である。この形態において亜麻布の価値は、単純な価値形態の場合と同様に相対的に、だが一種類ではなく無数の種類の使用価値によって表現されている。この交換関係のなかではそれら無数の使用価値が全て亜麻布に対して価値物として現われ、それぞれが亜麻布の価値性質を照らし出している。また、等価形態にある多数の使用価値の背後に同じ数だけある具体的有用労働が全てが、価値物をつくる同じ人間労働として現われている。それらの具体的有用労働はいまや「人間労働そのものの特殊な実現形態または現象形態」(B.1,S.78.) と認められる。つまり亜麻布の価値はこの全体的価値形態においてはじめて無差別の人間労働の凝固として現われる。

商品世界のあらゆる商品が全体的価値形態をもちうる。だが、全体的な価値形態においても、一商品の価値はまだ無数の特殊な使用価値で表現されているにすぎない。諸商品の価値は未だ一般的な表現形態を得ているわけではないのである。したがって諸商品の価値の大きさも、無数の雑多な種類の諸商品の様々な量で表現されているにすぎず、相互に直接に比較可能なものとはなっていない。また諸商品の価値を生み出す同じ人間労働も一般的な現象形態をもってはいない。

全商品の全体的価値形態において等価形態に立つ諸々の商品のうちから、ある特定の商品が選出されてただ一つの等価物とされると、諸商品の一般的価値形態が現われる。例えばそれが亜麻布であるとすれば、

C.一般的価値形態

1 着の上着

10 の茶

40 のコーヒー = 20 エレの亜麻布

1/2 トンの鉄

・
・

(1 着の上着, または 10 の茶, または 40 のコーヒー, または 1/2 トンの鉄は 20 エレの亜麻布……に値する) という相対的価値形態に無限に並ぶ諸商品の価値が, 亜麻布のみによって表現される関係である。等式の左辺にある諸商品の価値は亜麻布の使用価値という統一的な現象形態を獲得している。そして等式の左辺にある全ての商品の価値を生み出す人間労働がはじめて一般的な現象形態(織布)を獲得している。さらに諸種品の価値量も一つの商品(亜麻布)の諸量として表され, はじめて直接に比較可能なものとして現われている。

D.貨幣形態

1 着の上着

10 の茶

40 のコーヒー=2 オンスの金

1/2 トンの鉄

・
・

いずれ商品も, それが社会的総労働の一部分の結晶である限りでは, 諸商品の一般的等価物となる可能性をもっている。しかし, 実際には一般的な等価形態の地位は特定の商品に独占される。例えば金や銀などである。こうして商品世界の他の全ての商品が特定の商品に唯一の価値物(一般的等価物)として商品世界の外に排除し, それらによってのみそれぞれの価値を表わすとき, その特定の商品が貨幣と呼ばれる。一方貨幣商品以外の諸商品は単なるさまざまな使用価値として現われる。

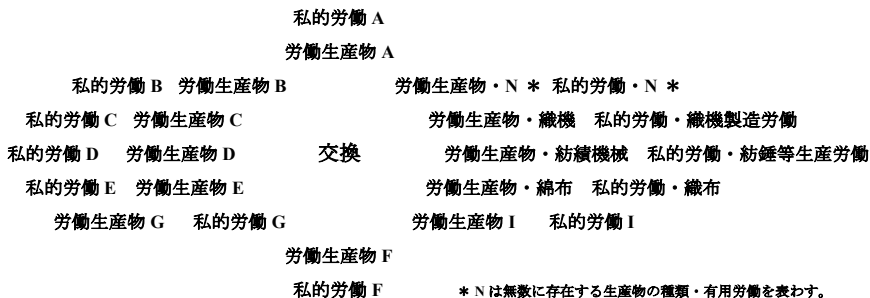
この価値形態では諸商品の価値は金(または銀などの貴金属)によって一般的に表現される。したがって, 諸商品の価値量も直接に比較可能な形式で表現

される。たとえば金の諸量で表現されている諸商品の価値が諸商品の価格である。

諸商品価値の貨幣形態では、金（あるいは銀）だけが価値物として現われ、それら以外の諸商品はそれらの現物形態で、相対的価値形態の商品としてだけ現われる。すなわち商品世界は貨幣商品と一般商品とに二極化して現われるのである。

第三節までに述べられてきたことを、第二節で詳述された私的労働に注目して簡単にふり返っておこう。

私的労働に焦点を当ててみたこの社会における社会的物質循環の概念図
(労働生産物・商品の交換に媒介される私的労働の交換)



* N は無数に存在する生産物の種類・有用労働を表わす。

どんな社会もその必要とする富を社会の労働力を用いて生産しなければならない。この社会（近代市民社会）ではその生産を相互に独立に営まれる「私的労働」（B.1,S57.）によって実現している。私的労働は有用労働および同じ人間労働（＝人体の諸器官がもつ諸能力の支出という意味での労働）という二重の性格をもつ。すなわちそれは一方では社会的分業体制の一環をなす有用労働として、特殊な有用性をもつ様々な使用価値を他人のために作りだして社会全体の様々な欲望を満足させなければならず、同時に、それが社会的総労働力の一部分の有効な支出であり、同じ人間労働

力の支出であることを示さねばならない。それぞれの私的労働が社会的分業体制の諸部分を構成しているこの社会では諸労働の生産物は有用性をもっており使用価値なのであるが、それは他人のための使用価値、社会的使用価値なのであり、個々の生産者自身の欲望を満たす使用価値ではない。生産者が自身の欲望をみたすために必要とする使用価値は、他の生産者たちの私的諸労働によって生産され、さしあたっては他人によって所持されているのである。したがって労働生産物の交換はこの社会の物質的循環の不可欠の環をなす。言い換えればこの社会では生産物交換は必然的であり、その交換の場において労働生産物は商品という形式で現われるのである。交換の実現によって諸々の商品の二つの属性（使用価値および価値）が、またそれと同時に私的労働の二つの内容（社会的有用労働、同じ人間労働）が実際にも承認されることになる。

社会的物質循環が労働生産物の交換を求めるといっても、そのことの直接的結果は「全体的価値形態」、すなわち諸商品の価値が雑多な種類の諸商品の現物形態で現われるということではしかない。しかし、これでは諸商品に社会的総労働の諸部分が加えられ、したがって価値であるというそれらに普遍的な性質も、そしてその大きさも統一的な現象形態を得ることにはならないし、また諸商品の交換そのものも一般的には実現されることのないこと、偶然事とならざるを得ない。つまりはこの社会の社会的な物質循環そのものが不可能となる。

ところで、そもそも価値性格は「同じ人間労働」の結晶というこの社会の全ての労働生産物をもつ属性であり普遍的な性格である。にもかかわらず商品価値の雑多な現象形態は商品価値の普遍性を自己否定するものに他ならない。だから諸商品の価値性格がこの雑多な形態にとどまるはずもないのである。言い換えれば、商品価値は本来的に普遍的あるいは統一的なその表現形式を要請するものなのであって、それゆえに商品の価値形態もさらなる発展を遂げるのである。そして実際にも、商品の世界はさまざまな現物形態＝使用価値をもつ商品のなかからある特定の商品を選び出してこの世界の外に排除し、他の全ての商品が当該商品の現物形態によってのみそれら自身の価値を表現するというやり方で、統一的な商品価値の存在形式を実現するのである。諸商品の価値を表現する材料としての役割が特定の諸商品に固定され、それらの独占的な機能となったもの、それが貨幣と呼ばれる商品に他ならない。

こうして商品価値はその普遍性にふさわしい統一的な現象形態、表現様式を獲得す

る。また商品価値の貨幣形態においては、商品世界は価値物である貨幣商品と単なる使用価値である一般商品とに分裂して現われる。そのことが商品の本性——使用価値（ただし社会的使用価値）であり同時に価値でもある——の必然的な論理的帰結であることは明らかである。

この社会の物質的循環が実現されるためには貨幣商品と一般商品とに分裂した関係は否定され、諸商品の交換が実現されなければならない。そしてそれは実際にも貨幣に媒介された商品価値の運動（商品価値のメタモルフォーゼ）の総体、すなわち商品流通（Zirkulation）と貨幣流通（Umlauf）という形式で実現される。諸商品の交換については後述第三章において、貨幣の諸機能を論ずるなかで、そうした商品価値の二つの運動形式が示されることになる。

（未完・続）